

国際ロータリー第 2780 地区

横須賀北ロータリークラブ週報

2018～2019 年度



インスピレーションになる

例会日 毎週火曜日 12:30～13:30
例会場 かながわ信用金庫追浜支店 3階 横須賀市追浜本町 1-28
 TEL 046 (866) 1515
事務所 鈴木ハイツ 2F 横須賀市追浜町 3-22-202
 TEL・FAX 046 (866) 1801
 URL: <http://www.yokosukakita-rc.jp/>
 E-mail: info@yokosukakita-rc.jp



会 長 竹永 薫 副 会 長 品川 昌義
 幹 事 高田 源太 会報委員長 芹澤 達之

2018年 10月 29日『月曜日』
 横須賀北RC第2738回
 横浜金沢RC第2389回

点 鐘
 合 唱
 司 会

「奉仕の理想」

中田 勇一 幹事 (横浜金沢ロータリークラブ)

ゲスト

やまもと しょういち
 郷土史家 山本 詔一 様
 ローター-米山奨学生 王 歆 さん



「出席報告」

(本日)10月29日

総数	出席対象数	出席数	出席率	メイクアップ	計	修正出席率
24名	23名	11名	47.83%	12名	23名	100.00%

(前々回)10月2日

総数	出席対象数	出席数	出席率	メイクアップ	計	修正出席率
24名	23名	18名	78.26%	2名	20名	86.96%

「メーカーシップされた会員」

10/5 クラブ管理運営委員会 伊与田あさ子会員
 10/9 第1グループ会長幹事会 竹永 薫会長 高田源太幹事
 10/13 地区大会会長幹事会 竹永 薫会長 高田源太幹事
 10/14 地区大会本会議 竹永 薫会長 高田源太幹事 福嶋義信会員
 芹澤達之会員 品川昌義会員 前川永久会員
 平林祐樹会員 伊与田あさ子会員

10/17 横浜西ロータークラブ 石井伸二会員
 10/25 三浦ロータークラブ 千葉 茂会員 前川永久会員 平林祐樹会員
 10/29 神奈川ロータークラブ 芹澤達之会員

「ニコニコBOX」

本日は横浜金沢RCとの合同例会のためごさいません。次週宜しくお願い致します

「会長あいさつ」

〈横須賀北ロータークラブ 竹永 薫 会長〉

皆さんこんにちは。年に一度の合同例会楽しみにして参りました。山本先生のお話楽しみです。本日はお世話になります。宜しくお願い致します



〈横浜金沢ロータークラブ 佐竹 靖幸 会長〉

本日は年一回の横須賀北ロータークラブさんとの合同例会です。郷土史家の山本詔一様をゲストにお迎えしております。宜しくお願い致します



「スピーチ」

～郵便の父・前島 密～

郷土史家 ^{やまもと}山本 ^{しょういち}詔一 様

郵便の父・前島 密は天保六年（一八三五）一月に越後国中頸城郡下池辺村、現在の新潟県上越市に生まれた。幼名は房五郎といい、生家の上野家は幕府から名字帯刀を許されていた豪農の家であった。父親は前島が生まれた年の八月に亡くなっており、前島の教育は専ら母・ていから受けたもので、昼は機織のそば、夜は糸車の脇で文字を教えられたと「自叙伝」の中にも記している。



十歳になった時、高田の倉石どう窩の塾の評判を聞き、母と離れて一人倉石の塾で勉学に励んだ。しかし、高田での学問に飽き足らなくなった前島は、十二歳にして江戸へ出てくることになる。江戸での生活は苦勞の連続であったが、その中で出会った高野長英が翻訳したドイツの兵法書「三兵答古知幾（さんへいたくちき）」（歩兵・騎兵・砲兵が連携しながら戦略する戦術が記された本）は、この書物を書き写す仕事で生計を立てていた前島が三度も筆写する機会があり、その内容までも理解できるほどになり、その後の前島に大きな影響を与えた書物となった。

十八歳の夏、浦賀沖へアメリカ東インド艦隊の司令官ペリーは率いる四隻の黒船が来航する大きな事件が起きた。この時浦賀奉行で江戸に在府していた井戸石見守が、浦賀へ駆け付ける通詞を兼ねた従者を応募していることを知った前島は、口入れ業者に無理を言って頼みこんでこの職を得た。これが一番近くで黒船やペリーを観察できる方法であった。しかし、英語はもとよりワザダ語さえも満足に出来なかった前島は、長く留まることで化けの皮が剥がれることを恐れて、黒船を見届けるとこの場から立ち去ってしまった。

浦賀で黒船の来航を見届けたことで前島の人生に一代転機が訪れた。それまで書物

から得た知識で幕府の海防政策を批判していた自分自身も日本のことを何一つ知らないことがわかり、自分の目で現状の日本を知ることが、世界の中の日本を知る第一歩であると考えられるようになった。そのために北陸道から山陰、鹿児島を除く九州、四国と旅をして見聞を広め、国内の状況を知り、西洋への関心が益々強くなった。

江戸へ戻ってからは下曾根金三郎に西洋式の砲術や操練を、竹内卯吉郎に機関学を学び、さらに函館にいい教師がいると聞けば飛んで行き、持ち前のバイタリティを発揮して、ここでは横須賀に軍港を開くことを貢献した栗本瀬兵衛（鋤雲）と知り合い、栗本のバックアップにより、日本一周の船旅を経験し、ここでは測量方法を学んでいる。

こうした努力が認められ、慶応元年（一八六五）には薩摩藩に招かれて開成学校で英学を教え、薩摩藩の重臣たちとも深い交流を持つようになった。

慶応二年幕臣の前島家を継いで正式に「前島」を名乗るようになった。戊辰戦争で官軍が勝利すると、近代日本の首都をどこへ持っていくか議論され、大阪にほぼ決まりかかっていた時に、前島は大久保利通に意見書を出した。そこにはまだ未開発の地であった北海道を含む日本全体を見渡した時に、大阪では西に寄り過ぎていることで江戸を第一候補にすること、さらに江戸の利便性は諸外国との交流が可能な横浜があること、さらに諸外国との交通手段の艦船にトラブルが発生してもそれを修理できる港・横須賀の存在が上げられていた。この意見書を読んだ大久保は再度会議を開き、首都を江戸にすることを決定した。国際性を重んじていた新政府へ幕臣前島の大胆な発言であったが、これはそれまでに培った前島の人脈が大きな後ろ盾になったことが想像できる。

明治新政府にも重用された前島は、明治二年七月に民部省改正掛となり、ここで伊藤博文や大隈重信らと明治国家の基礎となる若き人材が集められた。

明治三年（一八七〇）郵便制度を学ぶためにイギリスに派遣され、翌年には日本の郵便制度を立ち上げた。

晩年は横須賀市芦名に住み、大正八年（一九一九）四月、八十五歳の生涯を閉じた。どうして芦名に住むようになったのか、正確にはわかっていないが、浦賀ドッグの創設に関わり、初代社長になった塚原周造は前島を敬愛しており、その塚原の別荘が芦名にあったことが一つの要因ではと謂われている

～例会風景～

